

〔嬉遊笑覽器用二下〕近ごろジッ。キン。とて、茶盃の數十あるを、一ツ、色を異にし、繪も各同じからず、老少年を、十様錦といふが如く、十錦とは呼なるべし、

〔雅筵醉狂集冬四〕ある人のもとへ行けるに、高雄の茶を煎じもてなしければ、音たて、木の葉まぐる、釜の茶を酌やもみぢのにしき手の碗。

〔色道懺悔男六〕まもく町の銀のころゑ

たかねど茶は、七厘ににえたつはなが所がら、うき世を墨染やきの碗に、きれいなすまる略。下
〔懷硯三〕氣色の森の倒び石塔

釣鍋に少き離を仕かけ、葉茶を煎じて、伊勢茶碗の手厚きに汲みなして我を饗應ける、

〔御入部伽羅女二〕僉儀は花崎二枚手形。

去年堀川の道具屋喜右衛門方にて、壹兩二歩に相調へし肴鉢御破り、廿人前揃ひし皿五ッ、唐津焼の茶碗。二ッ、是らも半分直にして百四拾五匁、合て四百四拾貳匁五分、御算用下されませと、亭主が後には、丸山中の男廿四五人すはといは、打なぐつても取べき行かた略。下

〔風流鎌倉土産三〕情はさまぐ

さきほどは御人下され、せんじちや、雨中のつれぐ、幸と、うれしくとりあへず、けふはあめの小止なく、御さびしさおしはかり、するがより到來の名物い。わ。茶碗。きれゐになど、世のはなしになりぬ、

〔北窓瑣談二〕一我友源子和が家に、常に用ゆる茶碗あり、管を吹て雙調にいたれば、茶碗おのづから鳴る、子和が父長昌、此茶碗を雙調々々と呼し、

〔風流鎌倉土産三〕火入にこがる、思ひ

ころしも彌生の最中、小傳次誘引して、山高氏へ案内すれば、茅屋の見苦敷に、うれしくも御尋と、